新潟県中蒲原郡村松町における武家屋敷保存を契機としたまちづくりに関する研究

藤　居　由　香

A Study on Community－Planning of the Preservation of Samurai-House in Muramatu Town

Yuka　Fujii

1．研究の背景と目的

1997年1月17日の阪神・淡路大震災から、3年が経過したにもかかわらず、復興が進まない地域が多々存在することは周知のとおりである。崩壊した建造物が、再建されれば、復興が終わる訳ではない。人間が生活する空間は、個人のものではなく、人々の協力関係の上に成り立っている。少しでも、心地よく生活していくために、協働で物事を進めていくことに慣れておく必要がある。ある日突然、みんなでまちづくりをしましょうと云っても難しいものである。全く何も無いところから活動を始めるのは、容易ではなく、準備運動が必要である。まちづくりの活動を行う際に、既存の組織をうまく活かすことの有効性は、西宮市安井地域の例[1)]で明らかにしたとおりである。後述するように、今回の研究では、既存の組織が、まちづくりの活動をすすめていく中で、組織を変容させていった点にも注目した。また、一般に、まちづくり活動の報告は、すでに軌道に乗りつつある状態のものが多いが、そこへ行き着くまでのプロセスも重要であると考え、課程を明らかにすることにも努めた。

本研究では、災害が起きる前にまちづくりに対する意識高揚をはかる手立てを準備しておく必要があると述べた[2)]ことを、実践に移行するための基礎資料を得ることを目的とする。

まちづくりと言っても、その主体は様々である。まちづくり協議会という組織ひとつ取り挙げてみても、さらに細かく類型化できることは、先[3)]に述べたとおりである。

今回は、「まちづくり協議会」という名称ではないが、タイプII[4)]に分類できる事例をとりあげた。このタイプは、住民が自分たちのまちに、危機感を抱いている場合に多くみられる。

方法として、行政とは無関係で、住民発意でまちづくりの取り組みをを始めたグループのある、新潟県中蒲原郡村松町を事例として、実地調査及び関係者へのヒアリング調査等を行った。

調査期間は、1997年6月～1997年7月である。

2．村松町の状況

新潟県中蒲原郡村松町は、平成８年現在、面積233.07平方キロメートル、人口21,637人（5,804世帯）の、衣料、食料を生業とする割合の高い町である。[5] 町の８割の土地を山林が占めており、自然環境に恵まれた所でもある。

江戸時代には、当初、村上藩の支配を受けていたものの、分家相続により、堀家３万石の城下町、村松藩として、正保元年1644年から12代の藩主が明治４年1871年の廃藩置県まで存続した。

昭和30年に１町４村が合併し、現在の村松町となった。

観光ガイドブックやＴＶ放映等で有名な、２回にわたり主人や村人を雪崩から救助した名犬、「忠犬タマ公」縁の地である。現在、村松町では、川内小学校に、新潟市には、新潟駅、白山公園に、さらに神奈川県横須賀市衣笠公園に、銅像が建てられている。

町内最大の公園である村松公園は、面積37.25ヘクタールの広さである。昭和57年に、にいがた景勝100選の第３位となり、平成２年に、日本さくらの会による桜の名所100選に認定された。3000本の桜を有し、県の「緑地環境保全地域」に指定されているだけでなく、「愛宕山生活環境保全林」の一部でもある。「公園の建造作業には町内各戸から３人手間の協力が行われた」という記録が残っていて、町人総出でつくられた、手作りの公園である。年間観光客は、24万人にも昇る。昭和63年に町の若手で組織された「ふるさと産業おこし推進会議」の案で、キャッチフレーズ「桜藩（さくらんど）」が産れた。町紹介のビデオテープも作成されているが、桜を中心に構成されている。竹下登内閣の時に、実施されたふるさと創出事業の１億円の使い途として、村松町では、人材育成を目的とし、財団法人「人材育成さくらんど財団」がつくられ、桜藩塾が開塾された。

その他、さくらんど会館や、さくらんど温泉がつくられた。さくらんど会館は、３年６ヵ月で利用者が、28万人にも達した。また、さくらんど温泉は、看板の建て方が不適切で、辿り着けずに道に迷う観光客もあるようだが、年間22万人の利用があり、盛況である。

秋の味覚、銀杏等の生産地であるため、樹齢200～600年の100本のいちょうを生かした「黄金の里会館」もある。特産品としては、観光ちょうちん、地酒、菓子、栗、銀杏、山菜、鯉の味噌漬などがある。

観光地としては、慈光寺、早出川ダム、大沢鍾乳洞などがある。慈光寺参道には、137本の杉があり、樹齢300年～500年と、県の天然記念物にも指定されている。1995年には、チャレンジランド杉川が完成した。ここには、いくつかの建物がある。そのうちの一つ、冒険の館は、宿泊１日１人3,000円弱で、最大100人が使用可能である。このチャレンジランド杉川において、特筆すべきことは、庄屋の館[6]の存在である。庄屋の館は、旧藤波邸である。藤波家は、天領だった上杉川村において、多くの水田と山林を持ち、代々庄屋を務めてきた家柄である。庄屋の館は、江戸後期の文化・文政時代（1804～1830）に建てられたと伝えられ、家屋は、平成３年まで（故）藤波平八郎氏が住んでいたが、村松町が買い取り、村松町チャレンジランド杉川の一施設としてとして整備された。屋内の畳の部屋は、「正形四間取り」である。玄関と座敷をぐるりと結ぶ廊下は、かつてぬれ縁であったが、明治時代に手吹きガラスを用いたガラス戸が入れられたそうである。まちづくりの勉強会等に、恰好の建造物である。

このように、村松町は、歴史と自然の２枚看板を持つ、様々な可能性を秘めた町といえる。この２つの財産を、どのように大切にし、活かしていくかが、課題である。

3．建築士会新津支部村松分会の取り組み

建築士会新津支部村松分会の有志により武家屋敷の調査を行った。その調査結果[7),8)]を平成7年6月建築士会甲信越大会新潟代表として発表した所、狭い範囲に十数棟の下級武士の武家屋敷が、固まって残存していることに対し、貴重だという評価が為され、その反響に、村松分会会員の方が、却って驚く結果となった。このことを契機に、村松町には、武家屋敷という財産があるということを認識するとともに、建築士会村松分会として、それをどうすべきかを検討し始めた。

村松町は、宝暦年間（1750年）の城下図と、現在の地籍図とを比べると、道路位置、曲り水路など、当時とほとんど変容していない。現在の国道290号線は、村松町の中心部において、城下町の特有の道筋のまま、珍しくクランクが残っている。戦後の都市計画において、歩行者や、コミュニティの立場を考慮せずに、車両通行の利便性のみを追及した結果、各地で直線道路が増加し続けている。1997年12月に開通した新潟市万代の地下道が一例として挙げられる。自動車で数秒の所を歩行者は、数分歩かねばならない。同じ地下開発でも、車を地下に、歩行者を地上にすべきであろう。それに比べ村松町のクランクは、通過交通者への村松町を告知するサインとして、また、村松町民に対しては、村松藩の歴史を実感するために、重要な役割を果たすのではなかろうか。

村松町内の建造物は、戊辰戦争の頃と、昭和21年頃に多く焼失した。現在、村松町には、1850年代の武家屋敷が残っている。その他、会津戦争で焼失したものの、明治4年までに再建された住宅が十数棟ある。しかし、残念なことに、部材の老朽化と生活様式の変化に伴い、ここ12年で5軒が姿を消すなど、急速に減少している。

調査対象地の成田邸は、約130坪程である。成田邸以外の村松町の武家屋敷は、皆似た空間構成になっているが、敷地は、80平方メートル程度のものが多いようで、成田邸は、規模が大きいことがわかる。特徴としては、田の字型の間取りで、玄関を入ると正面に刀置きがあることや、他県の武家屋敷では、諏訪藩以外にはほとんどない言われている、高さの高めの床の間である中床（ちゅうどこ）の存在が挙げられる。尚、庇が取り付けられたのは、後のことらしい。収入は、3人扶持給米合計で十石程度で生活は楽とは言えず、屋敷裏の菜園、畑は、少しでも生活を潤すために設けられていたと考えられる。樹木についても、実用本意で、藩の帳面に記して、屋敷替えの度に確認されていたそうである。武家屋敷の周りに植える植物が、藩によって決められており、梅、柿、ザクロ、なつめ、しゅろ等が植えられていた。しゅろは、縄として、蠅はたき、ちりぼうきとして各家庭でつくっていた。柿は、胃腸を丈夫にする効能があり、ヘタはしゃっくり止めに、渋は、血圧を下げるために、干柿は、吐血用に、さらに干柿に析出した粉は、のどの乾きや傷み、棟尿病によいと云われ、葉は、薬用にと、多様に活用されていた。その他、ざくろは、寄生虫駆除や婦人病の薬に、梅の実を煙でいぶしたものは、烏梅と呼ばれ、解熱、去痰、止せき等に用いられた。さらに、梅干、干柿については、自家用のみならず、売ることで現金収入を得ていた。

村松町の武家屋敷において注目すべきことの一つに杉の生け垣がある。もともと防衛が主目的ではあったが、杉の葉は、火起こし、防虫にも役立った。杉の育たないと云われる新潟県のみならず、全国的にみても杉の生け垣の町並みは珍しいのではないかと思われる。よって、残すべき価値があるといえよう。建造物に比べ生け垣は生活の利便性に影響を与えにくいので、保存意識が高揚すれば残しやすいはずである。

4．村松町商工会青年部の取り組み

村松町商工会青年部では、定例経営研究会が定期的に開催されている。その中で、まちづくりに関わる外部講師による講演会が行なわれたことがある。1996年7月4日開催の、新潟県土木事務所建築課課長の青木紘三氏による「村松町に今も残る武家屋敷」や、1997年6月3日開催の立教大学社会学部観光学科教授の溝尾良隆氏「地域の魅力創出とまちづくり」などである。これらは、インターネットの村松町商工会青年部のホームページにも詳しく掲載されている。

上記の様な、まちづくりの勉強を、商工会という立場で始めた背景には、村松町の商店街の現状に対する危惧があるようである。近年の大型スーパーの、全国各地への進出は、商業の活性化を促進しているとは言い難く、他の店舗から、顧客を奪っているようである。現に、島根県の県庁所在地である松江市では、大型スーパーの開店に伴い、以前からあった百貨店が撤退を余儀なくされた。また、大型スーパーの進出による小規模店舗の並ぶ商店街の衰退は、全国的に見られる現象で、1998年1月のＮＨＫ放映のドラマ「流通戦争」の題材になったほどである。1997年に建設省は、市街地の中心の駅周辺に、大型店の開店を認める方針を示したが、小規模店舗との共存共栄を図れるとは考えにくい。このように厳しい状況の中で、活路を見い出そうと、まちづくりに目を向けたことは、注目すべき事柄である。

定例経営研究会においても報告された、村松町の武家屋敷の存在は、商店街の近くにあるため、観光資源的な効果を期待し、武家屋敷保存と、商工会によるまちづくりが結びついたようである。そのため、新潟県村上市雅子皇太子妃殿下記念公園で行われたような、古い家屋の移築という手法を選択する可能性は低いようである。よって、保存することが第一目的ではないことがわかる。1970年代から盛んになった町並み保存運動も、最近は単に保存すれば良いのではなく多様化している。正解がある訳ではなく、それぞれのまちの事情に合った方法を模索していかなければならない。

その他、村松町商工会青年部親睦委員会の行事として、「ファミリー納涼会及び村松の昔話を楽しむ会」1997年8月26日に直央(なおひさ)神社（第9代村松藩当主掘直央縁の神社）において開催された。語りべには、週刊新潟朝日で村松の昔話を連載中の新潟県民俗学会会長の駒形あきら氏を迎えた。子供から大人まで、楽しみながら、村松の歴史を感じることのできる良い企画であったと思われる。当たり前のことではあるが、次世代を担う子供たちをどう育成するかが、未来のまちづくりの鍵を握っている。

5．村開塾の取り組み

村開塾は、文字どおり、村松を開く塾という意味を込めてつけられている。村松町商工会青年部有志を中心に結成された。もともと商工会青年部は、40歳までという年齢制限があることや、商工会だけで扱いきれない広範な内容にも積極的に取組むために、建築士会のメンバー等も加わり開塾された。その後、村松町の生き字引き的存在の村松町資料調査会の熊澤久平氏等、様々な分野、年齢の人達が集結し活動が始まった。

一般に、まちづくりの活動に長けているところは、自己発信型広報能力があると言われている[9]が、その点において、村開塾は条件を充分に満たしている。印刷したニュースを発行すると同時に、電子メールによる配信も行われている。電子メールによる「村開塾ニュースｐｏｌ．１」（1997．６．19）では、愛媛県大洲市に「小説　仙寿院裕子」雲村俊造著、新潟日報事業社発行

を送付の件についての報告がなされた。村松藩第11代当主掘直休の妻である大洲藩主の娘、裕子の村松での生活を描いた歴史小説を、大洲市役所に送付した所、市長及び、大洲市企画商工部商工観光課まちづくり対策課から反響が寄せられた。しかも、「おおず朝霧塾」という活動を行っているということもわかる等、村開塾の活動も、一挙に広範なものとなった。「村開塾ニュースｐｏｌ．２」（1997．６．28）では、村松七士（戊辰戦争の頃）の子孫の城下図などの話が掲載された。次いで「村開塾ニュースｐｏｌ．３」（1997．７．２）も発行された。その他に、印刷物として「村開塾　瓦版　ｐｏｌ．１」が1997年７月に発行された。内容は、三条市に村松藩の城門があるという説の解明談である。昭和54年に、見附市渋谷家から、三条市月岡道心坂川俣芳衛氏へ移転した長屋門（天保８年1837年）と、村松町役場前の大手門の案内文「堀直央の代に嘉永３年1850年城主格になるに及んで、大手門の修復、城郭の造営行って～（中略）～大手門は廃藩置県後、見附の豪農渋谷家に移された。」にある大手門は、同じものなのか、別のものなのかという議論が沸きおこった。その後の調査で、三条の長屋門は、当時、渋谷家が村松藩藩主の許しを得て、建てたことが判明した。今まで、不確かだった町の歴史を繙き、疑問を解決するプロセスこそが、まさに、まちづくりそのものである。

1997年11月８日には、笹川邸の調査を行った。この調査を行った理由は、村松城を造った初代小黒杢右衛門と、笹川邸を造った５代目小黒杢右衛門の関係上、図面をみると、両者は似通っていると推察されることによる。その後、1997年12月22日村松城絵図面完成した。これだけでも、充分に村開塾の活動の成果があったと言える。まちづくりは、目に見えない手探ぐりの部分も多いが、多勢の協力で、一つの図面が出来たことは、達成感を得られ、今後の団結心につながったであろう。また、国土庁が提案している「ワイズユース（WiseUse）」という、歴史文化資源を大切に守りながら賢く活用する方法の、良い事例となり得ると考えられる。

６．ま　と　め

本研究により、住民発意で、行政支援を受けないまちづくり活動を行っている事例の進行プロセスと組織変容の実態が明らかになった。現在の所、建築士会のみ、あるいは商工会青年部のみでは、限界の感じられたまちづくりが、村開塾という新しい組織を形成することにより、まちづくりを円滑に進めやすくなり、より多角的なアプローチをすることができた事例といえる。

村松町における今後の課題としては、既存の組織との境界線をどう引くか、どの組織の所属で、どの活動をしたのか、明確に公表し続けることが大切であろう。組織の責任の取り方を考えつつ、保守的ならず、積極的に活動をするためには、何を改善しないといけないのか、検討する必要があろう。

また、野口政昭氏は、村松藩江戸家老野口彦兵衛の子孫で、新発田市在住であるが、野口氏の言葉「郷土史は、特定の愛好家だけのものではなく、一般市民に浸透していて、それが住民の郷土愛、お国自慢に繋がっている」を踏まえることや、村開塾で下田村赤坂の戊辰戦争赤坂古戦場の見学の際に、史実を知らない人が多かったため、知っておくべきという意見があったことを忘れずに、絶えず、自分のまちを知る行動に移すことが重要である。

謝辞：本研究をまとめるにあたりお世話になった、村松町商工会青年部中山学氏、建築士会新津支部村松分会樋口薫氏を始め、関係諸氏のご協力に感謝いたします。

註

1）藤居由香：新潟青陵女子短期大学研究報告、27号、1997、P157

2）藤居由香：新潟青陵女子短期大学研究報告、27号、1997、P159

3）、4）藤居由香：新潟青陵女子短期大学研究報告、27号、1997、P156

5）浅野純次（編）：都市データパック1997年度版、東洋経済新報社、1997、P565

6）庄屋の館パンフレット、村松町、1997

7）中山学：定例経営研究会資料、村松町商工会青年部、1996

8）樋口薫：武家屋敷調査サブレポート、1997

9）中山学：定例経営研究会資料、村松町商工会青年部、1996